

六稜會報

平成2年9月20日発行
発行 大阪府立北野高等学校内
六稜同窓会
〒532 澁川区新北野2-5-13
電話 06(303)5661代表
振替 大阪9-068025
六稜同窓会名簿刊行会
振替 大阪1-309004
編集 山本次郎・阪田啓信・鎌田俊一
印刷 フジエフォート印刷
電話 0729(87)8254

NO. 23

1990・9・20



森 繁 久 彌 氏 (45期)

北野高校 名誉教諭に推戴される

1990. 6. 18 於 本校文化祭

117周年総会

会場 日本綿業倶楽部

大阪市中央区備後町2丁目5番8号
☎ 06-231-4881

日時 10月27日(土)

2:30 PM 受付
3:00 PM 総会
4:00 PM パーティー開宴

(新人歓迎 立食パーティー・ビール飲み放題)

会費 5,000円 (但し、S61卒以降一卒業5年以内と) ※乞う
卓話 S8卒以前-75歳以上の方 — 無料 出席通知

卓話



「外交と日本人」

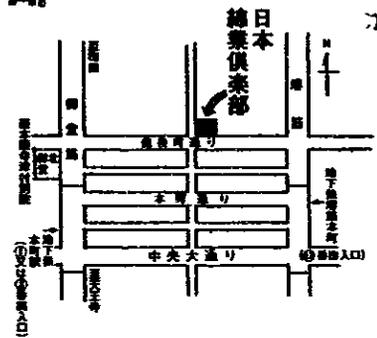
元中国大使・現原子力委員会委員

中江要介氏(53期)

卓話者紹介

- 大正11年生まれ、大阪市出身。
- 昭和22年京都大学法学部卒業。同年外務省入省。フランス、ブラジル各大使館、国連代表部、条約局法規課長、ベトナム、フランス各大使館参事官、アジア局外務参事官、アジア局次長を経て、同50年アジア局長、53年在ユーゴスラビア大使、57年在エジプト大使兼南イエメン大使、同59年6月から62年10月まで、在中国大使を務めて退官。同62年10月から原子力委員会委員。

公務のかたわらバレエ台本を執筆、第一作「いのち」は50年に東京、ユーゴで上演されたのをはじめ、第二作「動と静」は59年に東京とカイロで、第三作「蕩々たる一衣帯水」は62年に北京および東京で上演された。



新同窓会会長のご挨拶

旧制北野中学の頃を 思い浮かべて



このいけふじかず
鴻池藤一 (43期 昭5)

昭和5年旧制北野中学卒業
早稲田大学理工学部卒業
㈱鴻池組社長を経て、現在
取締役会長
全国建設業協会会長を経て、
現在、社団法人大阪工業会
会長に在任

私の生まれた明治45年は、その年の7月30日に明治天皇が亡くなられて、大正元年に改元された年でありました。又北野中学に入った大正15年に、大正天皇が亡くなられ、一年生在学中に世代は大正時代から、昭和の年代に改った時代です。

この度、上野会長の辞意固く、再三辞退致しましたが、不肖浅学にも拘らず今回六稜同窓会会長のご指名を受け、その責任の重大なことを痛感しております。現在色々な団体のお世話を引き受けて居りますので、時間的にも、能力的にもこの大役が勤まるかどうか、自信もありませんが、幸い同窓会の運営にはベテランの方々が、六稜会には多数居られますので、皆様方のお力添えを頂いて、勤めて行きたいと思っております。

私達昭和5年卒業組は、中津田校舎の最後の卒業生で、雨天体操場も屋根はあっても、床はまだ土間のまゝでした。勿論校舎も木造で、阪急百貨店も私の入学した頃はまだ阪急マーケットと称して木造の建物の時代でした。

今から20年程前迄は、明治年間に北野中学を卒業されたと言う、大先輩も同窓会に出席されて居り、当時のお話しでは「学校から神戸へ出掛けるのに、西宮で一泊して行った」と言うことを聞いて驚いて居た次第です、

六稜会の歴史の長さをしみじみ感じたものでした。

学校の歴史が古ければ、当然のこととして卒業同窓会会員の年令の層が厚くなることは免れません。従って、他に類を見ない北野六稜会のこの年令層の厚い壁を持ちながら、全卒業生が一致して、大きな力強い会を作る為には、各卒業年次の年度別の集会が強いものになることが、是非必要ではないかと考えられます。同じ年代で同じ思い出を持つ人達が一番強い繋りをもつことが出来ます。

それがやがて六稜会と云う大きな団体の力強い核になることは間違いありません。戦前、戦中、戦後の各時代、同じ日本と云いながら餘りにも相違の甚だしい時代です。夫々の時代に北野で学び、北野を卒業し、卒業後も北野六稜会で共に相語ることが出来るのは、寔に強い運命のきづなと云う他ありません。

この想いは卒業して年代が古くなる程強くなるものが、最近漸く分って来た様な気がします。生きて来た時代を異にし、学んで来た学舎を異にしても、それを一つにしてくれるものは、六稜同窓会と云う集団であることを、つくづく考えて居ます。

年会費は 2,000円です !!

よろしくご協力をお願いしまあす !!!

年会費制度の採用によって、随分と同窓会運営に余裕ができ、総会の運営・会報の発行、その他の事業も順調に進めてまいりました。ご協力を感謝し、謹んでお礼申し上げます。納入は郵便振替を利用して下さい。

番号 大阪9-068025 名称 六稜同窓会

▲お手元の六稜会報郵送封筒の表の *印 は平成元年度年会費納入済の印です。

今年の総会から

卓話 心と心、心とからだ

関山守洋 (67期)

本日は、精神科の医者も皆様方に縁の深い学問や治療を行っているという話をさせていただく。

人体には、必要な個所に十分な血液を供給する様自動的に制御するシステムがある。怒りや恐怖や不安で一時的に心身のバランスが崩れると、胃液が胃を溶かし、微小な潰瘍が多数でき、心が落ちつくど治る。自動制御システムは精神状態の影響を強く受けているのである。

精神科以外の医学は、今や行きつく所まで発達した感がある。人間が死なず、頭の方が先に死んで行くことになり、それが老人性精神障害の世界的な急増という形で現われる。80才で堂々と同窓会に出て来られる人達こそ100才まで生きる権利があるのだと、不幸なお年寄達の日常を見聞きするにつけ考えさせられる。

総理府が75才現在独身の方々を調査した統計をかなり前に発表した。9割の人が異性の友達を欲し、茶飲み友達という他に、8割がずばりセックスの為だと答え、男性の7割弱がセックスは可能であると答えている。75才の男性の独身者で妻を亡くしてから20年以上長生きしている人は殆んどいない。この結果は興味深い。

精神衛生は実に難しい。戦前アメリカのある工場で、ベルトコンベアーのラインの生産性を向上させる為に、実験を行った。音楽を流し、照明を明るくすると、そのたびごとに生産性は向上した。今度は音楽を止め、元の明るさに戻してみた。そのたびごとに生産性は逆に向上したのである。これは、研究員が「あなたは今日、機嫌よく仕事できましたか」と毎日一人一人に聞いたことの効果によるものとしか考えられない。(その当時の)機械化され、企業化された中へ人間が入って行く時、職場での人間的な接触がどれだけ確保できたかが、生産性の向上に影響したのだとしか結論できない。

ドイツのある会計事務所に7人の女性事務員が勤めていた。6人は有能だが1人は失敗ばかりしていて、6人の足を引っ張るのでお辞め願った所、毎日丁丁発止の女の戦いが始まり、一人辞め、二人辞めして、一ヶ月で事務所は解散になった。職場の人間関係がいかに大切であるかを教えられるレポートである。

私はここ15年位前から見かけ上健康な方々に我々の医学がどこまで役立つか、特に精神医学はどうかということに興味として取り組み始めた。この頃から日本でも、会社、産業でメンタルヘルスが重要視され出した。労働省も先頃、これをやらねばならぬと言いつつ出した。私は財界の人とお付き合いが何人かあるが、人事のちょっとした相談にあずかる事もあり、喜ばれている様だ。精神科医も狭い範囲でなく、そういう所へ活躍している場を作らねばと思う。企業でも精神に破綻を来した人をはじ

東京六稜会第33回総会の報告

平成2年度東京六稜会総会が6月8日丸の内・工業倶楽部に於て開催された。毎年この時期は梅雨入りも近く天候には恵まれないことが多く、幹事は天を仰いで出席人数を心配するのが常であったが、今年は珍しく快晴に恵まれ出足も上々であった。

総会司会63期岩木俊氏の開会の辞で幕を開け、東京六稜会河崎晃夫会長、六稜会名誉会長藤枝榮母枝校長の挨拶に続き71期黒沢清治君(国際花と緑の博覧会協会広報報道部長)が「国際花と緑の博覧会」-関西の新しい潮流を読むと題してスライドを交えながら博覧会会場の模様を詳しく紹介され、時機を得た講演で興味深く聞かせていただいた。

続いてのパーティーは今年度当番の71期勝村義和君の司会で和やかに開かれ、恒例の新人紹介の後、花博リトグラフポスター・航空券・ホテル宿泊券・バイオ缶詰(花・トマト)の抽選会が行われ好評を博した。商品の提供者、花博協・黒沢清治君、全日空・鈴木八郎君、住友林業・小林紀之君(71期)には改めて御礼を申し上げます。

最後に72期西野敏克君が来年度当番の抱負を述べられ、校歌斉唱で幕を閉じた。

酒井 昭 (71期)

き出すだけでは企業倫理を問われよう。そういう人を精神科医の手助けで上手に使うて行く様でありたい。

一昔前、アメリカの通俗的な精神科医が、人間には無能になってしまうレベルが夫々あり、無能のレベルに達するため努力をするのだと言いつつ出した。一例をあげる。小学校の先生として有能だったので教頭になり、教頭としてはまだ有能だったので校長になり、無能のレベルに達した。無能と認めたくないから仕事をたくさん作る。その本では委員会作りにも熱中したという。

ある会社で猛烈に出世した人がどういふ訳か急に元気がなくなり完全な鬱状態になった。人間は速度を感じず加速度を感じる様にできており、飛行機が離陸する時スピードを感じ、高空での水平飛行では感じない。急角度でぐんと上がって水平飛行に移ろうものなら、一瞬下へ落ちたように感じよう。この人も、更には上へは順番待ちという水平飛行に移ったとき自分が落ちたと感じた。有能な人に起こる失速型鬱病の例である。

この逆に本来その能力がないにもかかわらず自然に偉くなってしまい、ストレスに負けて鬱病になる例もある。ホテルのベルボーイで就職すれば、ロンドンーのベルボーイになってやろうと思いつているが、日本人は違う。またホテルのベルボーイならベルボーイのままおいてあげるという社会的構造は欧米にはあるが、日本にはない。

クオリティオブライフという考え方を推し進めると今日本で評価されている社会的レベル、立場が果して幸福なのかと感じざるを得ない。まだ53でニヒリスティックな考えになるのはどうかと思うが、せめて75才で何とかな様頑張りたい。御清聴ありがとうございました。

会 務 報 告

平成元年9月11日常任理事会を母校で開き、2ヶ月に1回、定例の常任理事会を母校にて開く旨決定。

常任理事会(平成2年4月21日)於清文社
出席者 鴻池副会長、河崎副会長、藤枝名誉会長、稲畑勝男理事(56回)、奥田、緒方、大山、楢崎、山本、堤、丸野、清原、木村各常任理事、学校から原田教頭(65回)、事務局から平、鎌田。

1. 会長交代の件

上野会長の辞意が堅いので、後任を鴻池副会長にお願いし、上野会長には顧問にご就任願う。
56回の稲畑勝男理事(会長委嘱理事)を副会長にご就任願う。

- 平成元年度決算報告並びに平成2年度予算案
- 平成2年度総会について
- 常任理事増員について

第1回理事会(平成2年5月18日)於日本縮業倶楽部。出席者 鴻池副会長、藤枝名誉会長、全常任理事、理事計50名出席。

1. 会長交代の件

常任理事会(4月21日)の案を承認。

2. 平成元年度決算報告並びに平成2年度予算案

3. 平成2年度総会について

10月27日(土)日本縮業倶楽部にて。会費については決まらず常任理事会に一任。

4. 常任理事の増員について(特に74期以降)

常任理事会に一任。

5. 母校旧図書館老朽化に伴う改修工事に際し、同窓会より改修費の一部、百万円を寄付する。

常任理事会(平成2年6月4日)於母校校長室

- 常任理事の候補をあげる。継続審議する。
- 会報を折らずに発送、振込用紙は四連式とする。
- 総会の会費は卒業5年以内も無料とする。

会 計 報 告

平成元年度 六校同窓会 一般会計報告

科 目	元年度予算	元年度決算	備 考
収 入 の 部	円	円	
1. 前年度繰越金	1,681,248	1,681,248	
2. 入会金収入	2,007,000	2,011,000	2,911人×1千人
3. 年会費収入	8,200,000	7,717,000	3,858.52円 × 2千人
4. 広告収入	100,000	0	
5. 臨時会費収入	800,000	600,000	150人×4千円
6. 寄付金収入	10,000	70,000	
7. 利息収入	5,000	18,412	
8. 雑収入	0	0	
収入合計	12,813,248	12,097,660	
支 出 の 部	円	円	
(1) 運営費	*4,845,000	*4,648,607	超過分子費へ(名簿発行に際する分も含む)
1. 人件費	*1,200,000	1,290,000	
2. 旅費・交通費	260,000	244,340	
3. 通信費	150,000	142,324	
4. 印刷・事務用品費	85,000	50,863	
5. 会議費	350,000	350,000	超過分子費へ
6. 雑会費	2,000,000	2,000,000	超過分子費へ
7. 庶務費	400,000	322,010	超過分子費を全
8. 雑費	400,000	339,070	
(2) 会報発行費	*4,100,000	*3,367,681	
1. 編集費	100,000	90,000	
2. 印刷費	2,500,000	1,907,506	
3. 発送費	1,500,000	1,350,176	
4. 雑費	0	0	
(3) 山形部全国大会出場経費		* 500,000	
(4) 予備費	*1,868,248	* 549,725	
1. 人件費	0	217,600	
5. 会議費	0	25,700	
6. 雑会費	0	306,345	
(5) 他会計へ支出	*2,000,000	*2,000,000	
1. 基金獨立会計	1,500,000	1,500,000	
2. 名簿特別会計	500,000	500,000	
支出合計	12,813,248	11,095,013	
次年度繰越金	0	1,011,647	

平成元年度 六校同窓会 名簿特別会計報告

科 目	元年度予算	元年度決算	備 考
収 入 の 部	円	円	
1. 前年度繰越金	1,964,072	1,964,072	
2. 名簿売上収入	10,000,000	13,849,000	
3. 広告収入	5,000,000	5,290,000	
4. 利息収入	100,000	126,051	
5. 雑収入	1,000	0	
6. 一般会計より受入	500,000	500,000	
収入合計	17,565,072	21,729,123	
支 出 の 部	円	円	
1. 編集費	1,200,000	0	
2. 印刷費	9,000,000	8,240,000	注1
3. 発送費	900,000	1,300,530	注2
4. 更新費	1,600,000	1,964,074	注3
5. 海運費	1,240,000	1,207,512	注4
6. 雑費	1,000	214,650	
7. 予備費	624,072	0	
8. 名簿発行準備費	3,000,000	1,617,287	
支出合計	17,565,072	14,564,653	
次年度繰越金	0	7,164,470	

名簿売上内訳3,000円×7冊(旧名簿)、4,000円×3,457冊。

平成元年名簿、印刷3,900冊、教職員配付130冊、寄贈168冊、売上3,457冊、残145冊。

注1 寄附内訳、旧職員15冊、広告記者153冊、名簿の印刷代。

注2 名簿の郵送料。注3 名簿データの更新。

注4 名簿発行経費等・名簿申込用紙等の郵送料。

平成元年度 六校同窓会 基金会計報告

科 目	決 算	備 考
収 入 の 部	円	
1. 前年度繰越金	53,722,967	大和銀行金銭信託
2. 利息	2,600,642	大和銀行金銭信託
3. 新設積立金	1,500,000	大和銀行金銭信託
収入合計	57,823,609	
支 出 の 部	0	
次年度繰越金	57,823,609	大和銀行金銭信託

以上の通り平成元年度六校同窓会会計報告をいたします。

平成2年4月13日

六校同窓会長 上野 洋一

本会報の正確であることを証します。

平成2年4月13日

六校同窓会監事 滝 井 尚 三

六校同窓会監事 楢 田 圭 兒

私の中にはいい話がいっぱいあります。一つでも多くお話をしたいのですが、縁側というのを御存知ですか。お婆ちゃんのサンルーム、隣のおばさんが世間話をしにくる簡易応接間、雨が降れば子供の雨天体操場 — それは今ではなくなってしまった。無用の長物では決してない。縁側の哲理というものがある。縁側は一つの文化圏です。開放的で、人を拒まず、どこからでもおいでというのが私は好きです。私達の心の周りにも縁側がついている筈なんです。それがなくなってしまった。文化がなくなってしまった。

小川宏ショーという番組をみておりました。戦争のさなか小学校の卒業証書を手渡してもらえなかった人々をスタジオに招き、30年遅れの卒業証書を手渡しというコーナーがありました。その後である先生の思い出話になりました。宿題をして来なかった者を並べて、先生は自分の腕を出して“先生の腕をひっぱたけ”“いいんですか”“いいからひっぱたけ”。次の日、宿題をして来ない者と聞くと全員が手を上げる。先生は全く動じない。全員に自分の腕をひっぱたかせた。そんなことが続いて二日目、ついに、ある生徒が“先生、ごめんなさい。私達が見えなかったんです。すみませんでした”と云って、全員が泣いたという話 — 何でもない話ですがここに教育の根幹があると思っているんです。

前に一度、北野で話をしたことがあります。当時、自殺する生徒が多くて、校長先生から自殺防止の話をしてくれと頼まれました。困った末にこんな話をしました。一諸君、あなた方を15才としよう。15才になる迄一体何人があなた方の為に動員されたかわかりますか。5人？ 20人？ じゃ聞きますがあなたの産着は誰が作ったの？ ボタンは、誰が貝を拾い、誰が穴をあけた？ あなたが胎内でとっていた栄養の素となった肉は魚は誰が？ そうやって教え上げれば200万人にもなる。そのお世話になった人々に対してあなた方は生きていく責任がある筈だ。それが世の中のルールです。

— その話をした二・三日後、一人の北野生が私の東京の自宅を訪れ、私の話を聞いて自殺をふみとどまった旨を伝えてくれたこともありました。

あなた方はどんな人生を歩み、どんな子供を育てることになるのでしょうか。しつけという字が書けますか。“身を美しく”と書くんです。いい言葉ですね。どうか北野の生徒だけは鏡のいい人になってもらいたい。

あなた方がこれから生きて幸福をつかまえるためにはいろんな苦勞がある。どうか困難には正面からぶつかってってもらいたい。又幸福というのは聡明な妥協であるという言葉があります。困難に正面からぶつかる強さと、いい意味での妥協を知る聡明さとを忘れないでほしい。根をはらずに大きくなったものにはもろさがあります。青年がやらずに誰がやるんですか。私は皆さんに大きく期待しております。又来ますから、この辺で御馳弁を。

(1990. 6. 18 要旨)

「ササベザクラ」守られた!!

神戸市がボンと7億9千万円

マンション計画用地買収

小説「桜守」(水上勉作)のモデルになったサクラ研究家、故・笹部新太郎さん(北野中学17期)が品種改良して種から成木に育てた「ササベザクラ」のある神戸市東灘区岡本5、岡本南公園(通称・桜守公園)。その隣接地に、マンション建設計画が持ち上がり、「このままではサクラが枯れる」と地元住民グループが反対していたが、5日、神戸市がマンション用地を買収、サクラの名所として平成4年春までに整備することになった。笹部さんの偉業を後世に伝えるための同市のいきな計らい。枯死のピンチから守られたササベザクラは今、ひとときわ鮮やかに咲き競っている。

笹部さんは大阪市出身。東京大学在学中からサクラの研究を始め、明治45年、同大学卒業後、就職せずに兵庫県宝塚市内の赤桑(えきらく)山荘でサクラの研究に専念。明治20年以降、人気が出たソメイヨシノを嫌い、ヤマザクラを中心とする日本古来のサクラの保護育成に努めササベザクラ1本を育て上げることに成功した。昭和44年に出版された水上勉氏の「桜守」(新潮社)の中では、「竹部庸太郎」のモデルにもなった。

公園(633平方m)は、もともと、笹部さんの邸宅だったが、市が昭和58年に買収、緑地公園にした。

「ササベザクラ」はこの公園に1本あるだけで、このほか、オオヤマザクラなど8種類のサクラ15本が植えられている。

公園南隅にある「ササベザクラ」は樹齢30年(推定)、高さ約8m。生育を考えると、南側の宅地(527平方m)を公園に拡張する必要が生じていたが、市と所有者の話し合いがつかないうちに、リクルートコスモス社(本社・東京)が買収。兵庫県高砂市の建設会社に転売され、同社が昨年10月、地上4階建てのマンション建設の着工を知らせる看板を出した。

このため、地元住民らでつくる「岡本南公園拡張推進協議会」(小山俊夫代表、約2,000人)が、「貴重なササベザクラが枯れてしまう」と反発、昨年11月、8,589人の署名を添え、市に隣接地の買収を求める要望書を提出するなど、保護運動を展開していた。

これを受けた市が建設会社と買収交渉にあたった結果、このほどマンション建設計画は中止され、リクルートコスモス社にもどされ用地を市が7億9千万円で買収することで決着した。今年度中に、隣接地の空き家を取り壊し、整備計画を策定、来年度に着工予定。

同公園では地元住民らが集まって、7日に親族会を開くが、小山代表は「市の買収を一日千秋の思いで持っていた。サクラ愛好者の願いの結晶だ」と喜んでいる。

(1990年4月6日 産経新聞から転載)

北野戦後史

題字 泉 梯二元校長

—— 連載第13回 ——

ある視点から

東京オリンピックから
万国博覧会ごろまでの
北野を

田上泰昭



その頃の筆者

(一) 始めに「評論『黎明』」から

1964年6月21日(日)付、弁論部機関誌「評論『黎明』」第5号は文化祭特大号を組み、泉 梯二さんと私に寄稿を要請している。戦後も20年に垂んとする昭和30年代最後の年の文化祭に合わせての特集である。

「文化部のあり方について」と題する泉さんの文章は全十ヶ条にわたって極めて簡潔に記述されたもので、その冒頭の第一条には〈一、筆者にあたえられたこの標題は、おそらく、最近新聞部に関して発生した問題について、顧問として、「文化クラブの活動そのものにつき、いかなる見解を持っているかを示せ。」ということであろう。〉と記されている。

第二条から第九条までに、「クラブ」という語の本質的な意味を説くことから始め、日本の学校に於けるクラブ活動が、主として米国の制度に倣って設置されたものであって、その意味についてはかの地でも学者の間で長い論争はあるものの、はっきりしていることは、どんな意味においても教科外活動ではなく、学校内のあらゆる事に対して完全な統制権を持っている校長が、クラブ活動に対しても最終決定権を保留していると、さらに日本の文部省の「学習指導要領」を引き、クラブ活動をふくむ特別教育活動が教育的に価値があり、教科課程の中に正当な位置を持つべきであって、これら特別教育活動をどのように有効に実施しているかによって、その高等学校が新しい教育に熱意をもっているかどうかを察することができる、といったことなどを紹介した上で、最後の第十条の結論を導き出す。

即ち、〈十、そして私は本校の文化クラブの在り方について具体的には次のように感じている。①文化クラブはその活動の内容をもっと全校生徒に知らさねばならない。それはクラブ員の権利でもありまた義務でもある。②生徒総数に比しクラブへの参加者が少ないが、その原因はクラブ自身の中にもある。たとえば文化クラブ間には時に多少の排他性がみうけられる。校内での横の連絡を

密にすべきであろう。また全般的に見て、自由性が「放任」に自主性が「クラブの私物視」に転化しているようである。これでは正しい活動ができない。③顧問は相談役であって、支配者であってはならないが、生徒は顧問との意志の疏通をさらにはかる必要がある。④校長は学校管理の責任者としてクラブ活動に対し最終決定権を持つのは当然で(これは自治会会則にも明記してある)、いったん最終決定を仰いだ以上は、生徒がこれについて云々することはおかしい。〉と結んでいるのである。

「最近新聞部に関して発生した問題」というのがどんなトラブルであったのか、しかとした記憶が私にはない。その時々々の問題についての分析・解決への思弁・努力において、他の人たちに比べて、それほど無関心・無責任な言動をする私だとも思わないが、次々に継起する学校内外の全般的な動きに留意し、具体的な運営などに関心を持ち続けてきた私ではないので、古い過去のことを思い起こすことは、まことに不得手である。しかしこのことについては、その年の文化祭後初めて発行の、昭和39年9月22日(火)付「六稜新聞」第82号で、当時3年生の陳 増英君が「声」という欄に、「生徒の自主性より背離の傾向」と題し、〈最近3年間に見られた種々の問題—印刷物の刊行や掲示の許可制(生徒は検閲という)にまつわる数度の事件、2年前のクラブ管理問題、去年の女子の夏服の制服制定、スリッパ問題、今年の文化祭の徹夜禁止等—における傾向は何を意味するのだろうか。〉と貫いているのがそれを指しているのだろうと想像されるものの、やはり具体的には思い起せない。

(二) エキサイトする「六稜新聞」

一方、この「六稜新聞」第82号とその2ヶ月後の11月20日(金)付の第83号では、前年度から論議され続けてきた、財団法人能力開発研究所による、所謂「能研学力テスト」で、進学指導委員会が2年生全員の受験を打ち出していたにもかかわらず、結果的には300名以上も受験しなかったとあって、西田駿夫さんが〈授業の代わりとして学校側で決めたことに従わなかったのだから、欠席者に対して何らかの処置がなされるだろう。〉と語っているのを、一面のトップ記事に出している。

この昭和39年度は竹内謙二前校長から浦野博夫新校長に引き継がれた初年度で、男女別のクラス編成が初めて実施された年でもあった。発足したばかりの5月16日付(土)第81号「六稜新聞」ではこのことを〈入試の為ならば教育的には非〉との見出しで論じた上で、生徒の意見としては、〈「女子をなめた態度も……」上る入試成績〉というインタビューを紹介、〈四月中旬校舎にはられた落書—こんな考えも〉という写真も掲載している。その写真には次のような文言が読みとられた。〈汗を流して勉強する 目的は一流大学から一流会社 そして生計を立てて、時には笑い、時には泣く、快楽の追求への我々の飽くなき欲求は、我々自身の首を絞めて、一箇の機械の部分品に迄墮ちさせる。古くなったり壊れたりした

らすぐ又次の部品と交換、それ一つでは何も作れず、唯々機械を動かす者をうらむだけ。それが今の我々なのだ」と。紹介されているのは生徒らの意見だけではない。〈コース制の真の意味を(平石先生)〉、〈やりやすくなった授業(栗井先生)〉と先生の意見も掲げれば、〈創造性のある教育を(東大教授・教育学・宗像誠也)〉、〈男女別には反対(大阪学大教授・教育学・西脇英逸)〉と識者の意見も載せ、他校の状況を〈能力制編成(池田高)〉、〈特別の措置見られず(住吉高)〉、〈理科文科でクラス分け(豊中高)〉、〈大手前校)〉、〈女子コース廃止(天王寺高)〉などと探ってもある。

これらが、前年の昭和38年10月3日(木)付第80号で北野80周年(現行90周年)記念特集を組んだ後に続く『六稜新聞』81・82・83号の紙上に見られる当時の北野の一面である。この間に見られた流れはどうやらその後昭和40年12月4日(土)付第86号ぐらいまで続いたようだが、第84・85号が新聞部の保存資料にはないので分らない。第86号ではトップに、「昭和39年度卒業生津田直輝君の答辞原稿年誌^{ききたの}における発禁処分に関する決議」・「年誌^{ききたの}の原紙切り取りに関する非難決議」の二件に関する(審議・討論を中止せよ)と、生活指導部が議事に命令している見出しの記事が、泉さんの写真入りで掲載されている。〈指導部は報告を聞く権利はあるが、決議を受取る義務はない。また学校のやり方もしくは校長を非難するのもあってのほかで、議会はいきすぎている。もうここで打ち切るのが当然である〉ということであつたらしい。又、同号の二面では、〈試験期間最後のテスト終る〉として総括記事を載せ、西田さんの〈能研テストにできるだけ多く参加させるため〉という学校側の態度のあいまいさが指摘され、それに対しては「責任ある行動」を生徒らに望むという論説も並記されている。価値を認めないといひながら、好奇心から受けたということに批判の論調を張っていた。

なお能研テストはいつまで続けられたのか。昭和41年6月10日(金)付第88号には〈納得のいく説明会を〉との見出しがあり、昭和41年12月7日(水)付第89号では〈能研テスト終る。注目される来年度〉とある。そしてその後、能研テストに関する記事が『六稜新聞』に見られることはなくなったし、生活指導部と生徒自治会とのトラブルも見られなくなった。やがてその紙面を占める記事は、修学旅行問題、H・R問題、教科登録のコース制問題、自治会役員選挙などで、学校側とのトラブルとしてよりも解説的に、一般生徒への慨嘆、自覚要請として書かれるようになって行く。

(三)『六稜新聞』に計報二つ

ところがそんな記事にはさまって、黒枠の写真入りの小さな記事が片隅に目につく。しかし第一面にである。前出の第89号と昭和42年6月24日(土)付第91号での曾木敏夫君、山田 充君逝去の記事がそれである。この二つの記事はそれぞれその全文を記しておく。

曾木敏夫君逝去

去る10月20日(木)曾木敏夫君(3の2)が登校中、心機能マヒのため死去した。

20日は中間考査の第4日目でバス停までへの横断歩道を渡ろうとした時よろめき、交通安全を呼びかけていた黄色いママさんのそばに倒れた。110番に急報して近くの病院に運ばれたが倒れた時すでになくなっていたらしい。

同君は化学研究部に所属しており、クラブ活動に熱心であり、また自治会関係の仕事にも熱意を示し、去年の監査会部長としての活躍は衆知の通りである。

ここに慎しんで哀悼の意を表し同君の冥福を祈りたい。

なお、曾木君の死に対し3年生の一生徒より次のような詩が送られた。

掠奪者

俺は奪われた
若さを奪われ

夢も 過去も 現在も奪われた

残るべきは俺の復讐だった
貴様等教職者に向かっては
総てを賭しての復讐が
手頃だと思えば適当だった
嘗て男が一人 ヘロデより逃れ得た如く
俺は俺一人隠れ蓑 既成道徳を身に纏い
貴様等と背中合わせで逃れ得た

今 いらくさの道は開けたにすぎない
教職者の武器を奪い取るこの俺の現前には鼻持ちならぬ七面鳥のおることよ

『六稜新聞』第89号

山田 充君逝く

去る5月20日(土)本校の山田 充君(3の10)が、自宅勉強部屋で遺書を残して自殺するという痛ましい事件がおこった。告別式には校長をはじめ、先生方、3年生約200人の参列者があり、しめやかに行なわれた。ここに同君の死に対して慎んで哀悼の意を表し、同君の冥福を祈りたい。

『六稜新聞』第91号

昭和39年5月31日(日)には3年生の北本周夫君が茨木駅(国鉄)ホームから準急「比叡」に飛び込み自殺を遂げているが、その後の『六稜新聞』第82号の「部説」では、2学期が始まって間もない2日、N工業高校生が地下鉄で、3日にはI高校生が青酸カリで宿題や成績を気にして自

殺したことを論じ、さらにある先輩たちは混乱した社会と取り組み、深く物事を考えようとして結局解答を得られず、日時を申し合わせたの複数自殺をするに至ったと触れながら、北本君の件は記事にもせず、昭和24年の「わたつみ会」のこたらしい件では、聞きかじりのことで済ましている。

一方、「曾木敏夫君御逝去」を報じた89号の「瀬江眺望」では、大手前高校1年生の電車飛び込み自殺に触れて、その遺書に、〈戦争と腐敗した政治がいやになった〉・〈受験と金のない国へ行きたい〉などの現代社会へのレジスタンスの言葉が残されているといい、〈どうして死んだのか、まったくわからない〉という担任の言葉に対しては、現代のマスプロ教育の悲劇といわねばならぬと難じ、〈自分にはわかる〉と言える心友がただの一人ありさえすれば死なせずにすんだのではないかと思われてならぬというのである。しかし、また91号での「山田 充君逝く」ではその事実だけにとどまっていた。

(四)「六稜新聞」への美しい寄稿

昭和39年から40年代早々に見られる「六稜新聞」の一つの面として、死・自殺に触れている記事をいくつか見て来たが、後日、自らも非業の最後を遂げられたという故石井正夫君(昭和43年卒)が卒業に当り、昭和43年2月26日(月)第92号に寄稿しているその全文をここに紹介しておこう。

「人格としての個人」 3の5 石井正夫

自然界の原則から明らかなように生あるものは総て生残るための闘争を強いられている。人間の生命を阻害するものが、冬の寒さであった時代には火や衣服を發明しなければならなかったし、それが狼であった時代には弓矢を創り出さなければならなかったが、その寒さや狼との戦いが即ち生活であった。

人類に対する外的環境への働きかけに一応のめどがつくと人間は群の中での自分を強く意識し出した。いつの間にか自分以外の人間は自分にとって協力する仲間ではなく生存競争の相手としなければならぬ日々を、人間は迎えてしまったのである。

人間の歴史は戦争の歴史に過ぎない。人類が進歩するためには常に戦争が必要である。戦争のために多くの強大な国家が減んだが、たちまち新しい、生命力にあふれた国家が次々と生まれ、確かに人類はそのたび毎に物質的に成長してきた。

勿論、地上から永遠に戦争を減し去ることは人類の最大の理想であろう。何故なら人は幸福を求める動物であり、幸福の条件については個人差があるが、戦争が凡ゆる人にとって不幸の原因となることは疑えないし、不幸は幸福に相対するものだからである。戦争の撲滅は理想であるが、それが高いものであるだけに一層現実を離れているものに見える。我々が歴史から学ぶことは人間の虚栄心闘争心であり、我々の時代にお

いても人間をもっと人間らしくみせるのは諦めの決してない生への執着である。

個人の生涯においても成長の目安になるものはいくつかの闘争であろう。入試や恋愛がごく普通は他との競争であり、ルソーの言う第2の誕生などが自分の自分への戦いである。自我の眼覚には多く外からの作用が動機となり、殆んどの場合社会への反抗となつてあらわれる。和泉式部や与謝野晶子などの歌人の眼覚も社会への反抗が基礎となつていたと思う。日本の最大の思想家内村鑑三にも本意ではなかったかも知れないが、反抗が必要だったのである。

さて、高校時代がこの第二の誕生の時期に当るならば、我々は個人として尊重されなければならぬ。ルソーが誕生という言葉を使った裏には「だから彼は他人の手を借りて新世界へ飛び出す」ことを容認する気持ちがあつたのだろう。強い精神力を持っている人とか特別の才能を与えられている人は別だが、平凡な大人でこの時代を独力で切り抜けた人はなかるう。それだからこそ我々は特に教育の場において個人として尊重されなければいけないのだ。しかし今の高校、名門北野においてすらも生徒は一個の人格として扱われることを知らない。「名門とは受験校として一流をいうのだ」そんな世間の羨望の混った非難に反発するが、名声にふさわしくない授業も少なくないのではないかも思う。

考え方によれば北野は非常に秀れた学校である。理由のひとつとして、良い友人関係をあげたい。唯これも良い友を得られた者の幸福であつて友人を得られぬまま卒業してしまう者もあろう。

親しい友だちはクラブ活動を通じて得られるようだ。次には級友ということにもなるうが、HRも成績争いが強く感じられる場所になっている。友人を得られぬまま勉強に興味を失った者はどうするか。その内多くの者は瞬間的の歓楽に身を委ね、ある者は死に向かう。僕の組や学年から脱落者と思われながら数人が学業の半ばで北野を去った。学業抛棄は主にその本人に起因する。という考え方は正しいだろう。しかし、そう言い切ることは、既に我々が級友を競争相手としてしか見ていないことに繋る。先生が悪い、学校が社会が悪いというのではなく、彼等の環境の一部としての責任を、我々は感じていなければならない。

自我の眼覚は内面の問題であるから、自分が諦めてしまうならば成長は最早止まるであろう。諦めてはいけない。何に対しても諦めなければ初湯をつかわせてくれる人はあらわれるものだ。今その時代にある人とこれからそれに向かう人への励ましである。

題名から外れてしまった。受験が近付くと落ちついて物事が考えられなくなる。何れの問題に対しても中途半端な書き方になったがすべての人に、自分自身に対する勇氣、社会に対する勇氣を持ち、それぞれ的人格を確立していただきたいと思うことを一応の結論にする。

最後に、卒業式と一緒に参加出来ない山田君、虎谷君に心から哀悼の意を表す。山田君には君への環境としての責任を、虎谷君には君への医学の責任を、僕たちは忘れていないし、今後も忘れないだろう、ということを告げておきたい。

※虎谷隆行君は、夏休み中に急性の癌により箱根で客死。

「六稜新聞」から全文の一字一字を原稿用紙の升目に写し取りながら、白皙端正な憂え顔の石井君を、そのまま今に想い起していた。私がこれまでに目にした限りでの「六稜新聞」中、最も美しい文章であった。そしてこれをそのまま、この拙稿の結論として、使わせて貰ってもいいように思われてならなかった。だが、しかし、私は私の文章で結びを付けねばなるまい。

(五) 結びに 再び「評論『黎明』」から

1964年6月21日(日)付、弁論部機関誌「評論『黎明』」第5号は文化祭特大号を組み、泉 悌二さんと私に寄稿を要請した。戦後も20年に垂んとする昭和30年代最後の年の文化祭に合わせたの特集であった。

敗戦後10年間、廃墟の中で文芸の小さな灯を人々の心にともしてくれていた鎌倉文庫の雑誌「人間」がその使命をほぼ終るころ、「人間創作集」で教えられた高見 順の「樹木派」の視点、を抱いて昭和30年春、私は北野に來た。次にその「評論『黎明』」の拙稿から抜粋する。

× × ×

それから10年、私は、私の文芸雑誌として、それによって生き、社会を思い、把握して來たものが、若い後輩たちの文化祭であったように思う。未熟な若者達の様々の作品が、若い同人雑誌のように、私には、飽くなく繰り返えされる創作の喜び、生きることへの撲みとして感じさせられて來た。それは収穫の祭りではなく、新しい生命の創造への門出の祭りとして、真摯な試みであった。10年、それだけの意味はあった。しかしそれがこの2、3年私にはどうにも、も早それだけではどうにも、我慢がなくなつたように思われはじめたのである。はじめには期待しなかつた。それなりの収穫が欲しくなつたのかも知れない。どう見ても美しくない、まとまりのなさ。そして毎年の間に合わせ。急造と性急な破壊、消失、八方へのばされた手はきびしい陶冶もなく宙にぶら下っている。そう思われはじめた時、私にとって、10年の若い人達の文化祭の使命は終つたように思われたのである。たゞ私のこんな感想とは別なところで、現在の文化祭の廃止をひそかにたくらむ世の中の一部の考え方に、非常にいい、口実を与えるのではないかと云う危惧を感じるのではあるが、しかし又、このままでマンネリズムの中でのめり込んで行くことは、より大きな口実を彼等と与えることになるという危惧の方が大きい。使命のすべて終つたものは消えて行かねばならぬ。そして、周囲の

悪意ある状況が、それを變えて行く前に、こちらの方でそれから脱皮し、新しい姿勢を獲得して行かねばならない。今その時期に來ていると思うのである。

× × ×

あらゆるものの分化、発展においては、常に最も真実に密着したところから、むなしい名目だけが遠ざかり廻り、その廻り構成された形骸から、むなしい号令が真実に頓着なく下りて來るようになるものだ。発展にひそむデカタンスがそんなところにある。私は、皮肉にも社会構成のこのデカタンスが、若い人達の文化祭の発展の中に必然的にひそんで來たマンネリズムを捕えて、はじめにはたしかにあった大切な萌芽をもつみとってしまうことを恐れるのである。その前に、夫それぞれに分化され、積み上げられて來た各クラブの問題から、共通のテーマを探し出し、強力な、根元に邁った態勢を作つて出發して行かねばならないと思う。カントは、彼の「人間学」の中で「人類の性格的なものは、地上における可能的な理性的存在者一般の理念と比較すると、次のようになる、——すなわち自然は不和の萌芽を人類に植付けて、人間自身の理性がこの不和から和合を、——少くとも和合への不断の接近を作り出すように意図したということである。この和合は理念としてはたしかに目的ではあるが、しかし事実としては不和が自然の計画に従い、常に進歩する文化によって人類を完成するための、——たとえ生の喜びを犠牲に供することが多いにせよ、——我々に知らぬ最高の智慧の手段である。」といっているが、一つの文芸雑誌、同人雑誌が、はじめに志された使命を終り、次のそれらに場所をゆずると同じように、若い人達の文化祭においても亦不断の脱皮と新しい営みがつづけられて行かねばならないだろう。しかしその時、どんな根元的真実を自らの中に把握し、どんな誓の姿勢で次の成長へと志すのかがはっきりと内に自覚されていなければ、狂暴な、野蛮行為によって、脅される退歩のために、決して安全を保障されているものではないということを知っておかねばならぬ。

「樹木——ある視点——」から

北野高校弁論部すでなく、この拙稿執筆を助けにお盆の里帰りをしてくれた故石井正夫君の精霊も再び彼岸に帰った。第81号「素顔拝見」で「北野に骨を埋めるヨノ」といった博本正和さんのその日も近く、私が「六稜会報」№15の座談会（俺が北野だ）といった、その「北野」もも早「俺」ではない。1990年8月16日(木)

たがみやすあき先生略歴

1929年5月14日、長崎県島原市生まれ。県立島原中学校、東京陸軍幼年学校、東京高等師範学校を経て、1953年旧制最後の北海道大学文学部卒業。同年札幌西高校に奉職、1955年北野高校教諭に。1990年3月定年退職。

現在、北野高校特別講師・大阪市立大学文学部非常勤講師として、なお漢文を講ず。

理想

編者 阿部隆一先生

初心 忘るべからず

— 北野リベラリズムとコミック、 又は日米構造協議との関係に ついて —



あべ 隆 一
実 方 謙 二

(63期 北海道大学教授)

私が旧制北野中学に入ったのは1945年の4月で、1951年3月に新制北野高校を卒業した。この会報では何回も語られていることだが、当時は敗戦直後の混乱期で、生活は苦しく、学校の授業もあまり役に立たなかったが、一方、今のような「管理」はほとんどなく、自由な雰囲気があり、「生徒」も好きなことをやり放題だった。在学中は演劇部で当時流行の「創作劇運動」(身近な題材を取り上げて自分で脚本を書き、演じる運動)をやっていた。今でもそうだが、私は生まれつき我儘だったから、権威が大嫌い、規則や決まり事に縛られることは耐えられなかった。その点から見ると、私たちの中学・高校時代は恵まれていたといつてよい。演劇部では、学校祭などの公演の前には、学校に泊り込んで舞台装置を作ったことも多い。そのとき、講堂の舞台の正面にあるピロートのカーテンの後ろで立ションをしたことがある。ここは、戦争中「脚真影(天皇の写真)」がうやうやしく飾られていた場所で、当時の私としては、これは、権威に対する反抗でもあった。戦争中は、北野でも軍事教育が最優先で、武道の教師などが大いばりだった。私は日本人らしくO脚(かに股)だったから、「気をつけ」をしても、膝と膝の間に隙間ができてしまう。すると、武道の教師が、膝の間に隙間があるのは、気合が入っていないからだといつて、膝を蹴飛ばされたことがある。それが、敗戦で一挙に権威を失ったのだから学校の中も混乱してしまった。その当時は、民主主義や思想の自由が新しい「理想」となったから、「生徒の管理」など出来るわけもなかった。だから、学校で煙草を吸うなど当たり前で、学校の帰り道に仲間と酒を飲むことも多かった。

このように、学校での生活は自由・気儘だったが、総

合雑誌や本などを貪り読み、芸術や社会科学など、それぞれ興味のあることは、自発的に熱心に勉強した。戦争中、天皇—国家—学校—教師という下らない権威に縛られていたから、社会の仕組みについての新しい考え方や、新しい芸術などは、当時の私達にとっては、眩しいほどの「贈り物」だった。私達は、マルクスやエンゲルスを齧っては、「社会」の教師を取っ組みたり、新しい小説や文学論を読み漁って文学青年(年齢から見れば文学少年というべきか)を気取っていた。だから、先生方から見ると、当時の私は小生意気で手に負えない生徒だったと思う。高校三年の時には、反戦運動をやっていた仲間への不当退学に抗議して、校長を生徒集会でつるし上げたこともあった。卒業式の日、ある先生は私の母に、「お宅の子供さんは、よく卒業できましたね」と言ったそうである。また、卒業後、大学に受かったことを職員室に報告に行ったとき、ある先生に「お前は要領のいい奴だな」と言われた。在学中、職員会議などで私の行動が何度も問題となつたらしい。ある冬の休みの日、空き教室で壊れた机をバケツで燃やしながらか仲間と話していたとき、厳格で有名な先生が突然入ってきてえらく怒られたことがある。その時は父兄呼び出しだけで済んだが、担任の先生などに文句を言われた母は、「先生はえらくご立腹だった」と笑って伝えてくれた。このような私が無事卒業できたのは、某先生のコメントのように不可解だったろう。しかし、別の見方をすれば、当時の北野には、伝統的なリベラリズムを背景として、私のような気儘者の存在を許容する「懐の深さ」があったといつてよい。

このような「悪ガキ」だった私も、今では大学の教師商売をしている。この大学教師という職業は、経済的には恵まれないが自由だけが取り柄で、このところ、高校時代の悪友と集まってはゴルフするなど、のんびりと過ごしている。もっとも「悪友」というのは私の方で、これは最近別の仲間から聞いたのだが、仲間の一人(社長のM君)のお母さんは、高校一年の時、担任の教師に「お宅の坊ちゃんは友達が悪い(私のこと)」と言われたそうである。当時、自分では、結構「まとも」な生徒だと思っていたが、傍から見れば、私は手に負えない生徒だったらしい。ただ、北野での六年間に身についたことは、新しい対象への旺盛な知的好奇心である。学校での授業でも、西洋史や日本史の先生などから、社会現象に対する新しい見方を教わったことも多く、その度に「なるほど」と感銘を受けたことを覚えている。しかし、新制度への切替えや、敗戦による混乱などがあって、新制高校一年や二年の学校の授業は、中学のときにやったことの繰り返しが多く、学校の勉強に時間を取られることもなかったから、自分の好きなことに熱中できた。最も熱心にやったのは演劇部の活動だが、当時の「創作劇」運動は、身の回りの生活の中に社会の矛盾を見つけるといったものだったから、当然、考え方は反体制的だった。その頃の私が知的な刺激を受けたのは、演劇部の仲間や、「社研」(社会科学研究会、左翼分子の巣窟)の仲間であり、このような仲間達から教えられては、社会科学(い

うまでもなく左翼的なもの)や、芸術論などの本を耽読した。北野での六年間は、自分に興味のあることを見つけて、その題材を自分の目で追求することで過ぎた。大学への受験勉強も、自分の知的好奇心を満足できるような方法で、楽しみながらやったものである。

ところで、私のやっている大学の教師商売は、授業以外の時間はどこで研究してもよい(建前は自宅で研修)し、行動や発言を管理されることもないから、私のような「気儘者」には何よりの職業で、世に、「大学の教師と乞食は三日やれば止められない」と言うほどである。ただ、まともに、この商売をこなすためには、社会に対して何か新しい「業績」を提供しなければならない。いわゆる「学問」のやり方は様々であるが、私が専門にしている「経済法」(独占禁止法やスーパー301条・日米構造協議などの国際経済法)の分野では、実際の経済社会で何が起きているかを、日々、フォローしていなければならない。実際の経済社会では、新しい現象が次々と起こるが、大袈裟に言えば、そのような新しい経済現象の仕組みを的確に理解し、それに対する処方箋を考えるのが、この分野の専門家の役割ということになる。判りやすく言えば、どんな問題でも、コメントや論説を求められたら、それを「さりと」とこなすのが、この商売の要領である。そのためには、世間の出来事を興味を持って常に観察していなければならない。それには、新聞記事を整理しておくことが不可欠で、私の朝は、新聞の切り抜きから始まる。学校の研究室には、大型のパソコンが置いてあり、新聞記事などの自家製のデータベースが収められている。

最近、エコノミストに、「輸入総代理店制の功罪一つくられた『ブランド信仰』の神話」と題する雑文を書いたが、これは、日本でブランド商品がなぜ高いのかを問題にしたものである。ここでは、ブランド商品を有り難がる日本の消費者が馬鹿なのか、高いものを売りつける外国のメーカーや輸入総代理店が悪いのかの点を取り上げた。これを分析するためには、ブランド商品の売れ行きとか、ブランド商品の販売戦略などの実際を調べる必要がある。ここでは、新聞記事のファイルと通産省や公取委の調査資料などが威力を発揮した。ただ、これは、卵が先か鶏が先かといった問題だから、扱い方ではどのようにも料理できる。一般には、ブランドを有り難がる日本の消費者が馬鹿なのだから、消費者の自覚が必要だと言われており、これで消費者が満足しているのだから、文句をつけることはない、という考え方もある。しかし、私の雑文では、販売店を高級店に限定したり、並行輸入を妨害したりするなどの、ブランド・メーカーの販売戦略が、日本でのやたら高い価格の原因であることを強調した。私は、昔から狡いことをして悪どく金儲けをしているのを見ると無性に腹が立つ性分だから(貧乏人のひがみか)、今でも書くものは、政治権力や経済的な権威には批判的である。その点から見ると、私は、「青春の尻尾」を引きずっている「『大人』になれない大人」なのかもしれない。

私のやっている教師商売は、若い学生さん達と付き合うのが仕事だから、いつまでも若やいだ気分で行られるのがいい。最近、年を取ったせいか、ゼミナールに女子学生が増えてきた。いまの女子学生はそれぞれ個性を持ち魅力的でしっかりしている。今の学生さんは利口だから、カラオケなどにも付き合ってくれ、学生さんに遊んでもらうのが教師商売の楽しみである。このほか、個人的には、ブルースを聞いたり、コミックを読むのも最大の楽しみで、葛城ユキの絶叫するブルース(とくに初期のナンバーがいい)をヘッドホーンで聞きながら、「ガキデカ」を読み返してガハガハ笑うのが毎晩寝る前の習慣になっている。この「ガキデカ」は、昔、「少年チャンピオン」に連載されていたギャグ漫画で、よく知られているギャグとしては、「死刑」とか、「八丈島のキョン」がある。この漫画は、バランスのとれた常識ある大人から見れば、下品で汚いだけだろうし、良い親ならば、この類の漫画は、読むのを禁止するのが当たり前かもしれない。この漫画では、ジュンちゃん、モモちゃんなどの可愛い子ちゃんや秀才の西条君(いうまでもなく、桜田淳子・山口百恵・西条秀樹のパロディ)といったキャラクターが登場し、何の取り柄もない「悪ガキ」のガキデカをやっつけてしまう。本来、ギャグが面白いのは、世間の常識を引っくり返すからであるが、「ガキデカ」の世界に入り込むと、世間の価値観を逆転した、眼の醒めるような新しい世界が開けてくる。私と「ガキデカ」の出会いは衝撃的だった。大学教師らしく屁理屈で説明すると、「ガキデカ」の世界を理解するためには、価値観の多様性を受け入れる柔軟な精神が求められる。判り易くいえば、常識に囚われずに、物事には各人各様の違った見方があるということである。結局「人それぞれ」だから、世間の常識からずれているからといって、仲間外れにしてはいけない。ギャグ漫画は、この当然でありながら皆が判っていないことを、改めて教えてくれる。

新しい見方を受け入れる「柔軟な精神」は、若々しい知的好奇心を持ち続けることで保たれる。これは、ギャグ漫画を読むためにだけでなく、実際の仕事にも必要である。専門の独占禁止法の関係で、今のところ、日米構造協議での日本側の対応策作りのお手伝いをしているが、そこで求められているのは、「これまでうまくやっていた日本での常識」を、国際的に通用するフェアなゲームのルールに置き換えることである。会議などで、経済界で成功された方々の意見を伺っていると、「日本での経営常識」からの頭の切替えが難かしいことがよく判った。構造協議関係のある会合では座長をやらされたが、このような「偉いさん」の答を宥めずして、もっともらしい結論を出すのが私の役割だった。この時役立ったのが、北野時代から培われた知的好奇心に支えられた「柔軟な精神構造」だったといつてよい。独りよがりな結論になるが、北野時代、手に負えない「悪ガキ」だったことが、今では「世のため人のため」になっているわけで、こんな私を受け入れてくれた「北野のリベラリズム」に改めて感謝している次第である。

第1回 六稜期別対抗親善ゴルフ大会

17期 (60期～76期) 144名大集合

優勝は72期 六稜の輪大きく広がる!!



意気あがる72期の代表

磯村 大沖 堀真
大井 崎 崎 橋 野
南 西
藤本 森

同期仲間のゴルフ大会も最近とみに盛んとなり、昨年は67期から72期の6期対抗(68期が優勝)が開催されて好評だったこともあって、これを上下にさらに上げ親善を深めようというのが、今回のこころみであった。各期世話人の御努力と西宮高原メンバー各位の御協力により、去る8月25日(土)、西宮高原ゴルフ倶楽部において、144名36組の六稜大コンペ(代表世話人 67期神宅寿昭君)が挙行された。

「各期の名誉よりも親善を」が本コンペのスローガンであったが、とはいうものの、各期の熱の入れ方は相当なもの。予選を行って選抜した期や、事前に合宿訓練に入った期など、それぞれの思いをこめた競技会となった。

競技方法は出場選手の1・2・3・5・7位のグロストータルで争われたが、第1回優勝の栄冠を獲ち得たのは、それぞれ77、79という好スコアを出したシングル二人を擁し、安定したチーム編成の72期であった。第2位は5打差で71期、そして第3位は2位に1打差の62期という大接戦。

プレー後はなごやかに懇親パーティ。特別参加の59期角井寿保氏の乾杯の音頭にはじまり、期をこえた交歓があちこちでみられ、ゴルフを通じ六稜健児の親善の輪が広がった。

表彰式では、整列する72期の選手らを代表して南尚三キャプテンの手に大トロフィーが授与された。引続き、個人賞の表彰に移り、ベストグロス賞は77の好スコアを出した藤本紀男君(72期)、第2位は79の沖辺宏君(72期)、そしてブービー賞ははるばる札幌から駆けつけた実方謙二君(63期)、また全ショートホールにかけられたニアピン賞は次の諸君に授与された。

ニアピン賞

長谷川圭市(62期) 山本和希(62期) 樋泉弘一(64期)
京谷嘉二(66期) 竹内 博(67期) 大崎邦夫(72期)
磯村昭夫(72期) 斉 文章(74期)

さらに、特別賞として、60～64期の先輩期に対して各期ベスト賞が贈られ、次の諸君が受賞された。

60期 山田文一(グロス82) 61期 徳永孝哉(82)
62期 山本和希(82) 63期 斉藤信義(83)
64期 稲本康雄(82)

クラブの御好意と御承諾により、別室のコンベンションルームを借り切った。

宴たけなわ、応援歌「瀬江の水」の大合唱がおこる。六稜の歌声は西宮高原にこだまし、興はいやが上にも高まった。そして最後は校歌でしめくり、来年の大会での再会を約したのであった。

なお、今回の大会に賞品を御寄贈下さった、藤田政江(65期)、仲庭成和(66期)、竹内佑一(71期)、奥田耕三(73期)、斉 文章(74期)、養島紘一(75期)、の諸君と、エントリーその他で格別の御世話になりました西宮高原メンバーの各位に対して、心から御礼を申し上げます。

六稜期別対抗ゴルフ大会成績

順位	期	グロス合計	1位	2位	3位	5位	7位
優勝	72	4 3 9	77	79	88	93	102
2位	71	4 4 4	84	86	89	91	94
3位	62	4 4 5	82	88	88	93	94
4位	65	4 5 1	86	86	87	91	101
5位	68	4 5 7	81	84	92	97	103
6位	64	4 6 3	82	85	93	98	105
7位	60	4 6 4	82	86	91	101	104
7位	61	4 6 4	82	89	96	97	100
9位	66	4 6 8	88	91	91	96	102
10位	67	4 7 0	92	92	93	94	99
11位	70	4 8 4	90	95	98	100	101
12位	73	4 8 6	84	93	94	106	109
13位	69	4 8 8	86	92	92	103	115
14位	63	4 9 3	83	96	99	107	108
15位	74	5 1 9	85	94	103	117	120
16位	75	5 2 5	91	97	104	112	121
17位	76	5 4 9	97	101	104	118	129

第1回 六稜クラブ対抗ゴルフ大会

優勝は野球部 13クラブ68名が参加

平成元年12月1日、西宮高原ゴルフクラブに、六稜各クラブOB13チーム68名が集い、第一回のクラブ対抗が開催された。参加者は60期から76期にわたり、女性も水泳部と陸上部から1名ずつ参加、色彩りを添えた。

チームの上位3名のグロストータルで競われた団体戦の栄冠は野球部の頂上に輝き、藤田祐良キャプテン(60期)にトロフィーが渡された。順位は次の通り、2位、テニス部。3位、ハンドボール部。以下、体操部、演劇部、ラグビー部、バレーボール部、応援団、卓球部、陸上部、水泳部、山岳部、剣道部。

なお、ベストグロス賞は山田文一君(60期、体操部)の81(同スコアの長谷川圭市君は年下のため2位となる)に対して贈られた。また、この日、竹内祐一君(71期、体操部)が2番ショートホールでホールインワンを達成し、全員の祝福を受けた。

第2回 六稜クラブ対抗ゴルフ大会

のお知らせ

昨年の第1回は13部、68名の参加で、野球部が優勝しました。今年は下記のとおり第2回を開催しますので、クラブOB会御代表の方は下記要領にてお申込み下さい。

記

平成2年11月30日(金) 西宮高原ゴルフ倶楽部

1チーム5名以上、8名まで。

(文化クラブの参加も歓迎します)

申込先 代表世話人 神宅 寿昭 (67期)

06-364-0620

事務局 菅 正徳 (69期)

06-203-7521

(昨年参加されたクラブへは、後日御案内致します)

田上泰昭先生(漢文)の最終講義

本年3月、同窓生200人を集めて母校で行われました。



小池義人先生出版記念祝賀会

原田 彰 (65期)

65期生有志約60名により平成2年7月11日、本町シティクラブに於て小池義人先生ご夫妻をお招きして「磊磊随想一余生四十年」の出版記念パーティが行われました。(代表幹事田中嗣也)

先生にとっては北野高校で唯一の担任を持たれた期であります。現在、須磨寺の管長その他の多くの役職をお持ちでご多忙であるにも関わらず早くご出席いただき盛会のうちに祝賀会を終えました。

この機会に、先生からは今回の出版でありました「磊磊随想一余生四十年」のほか先生のご著書、監修その他須磨寺関係の次の図書等を母校図書館の六稜文庫にご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。

「シベリアの鉄格子の中で一わが戦争と青春の墓碑銘」、「戦中戦後に青春を生きて一東大東洋史同期生の記録」、「滅びの美【敦盛】一須磨・一の谷・須磨寺」、「上野山福祥寺須磨寺一歴史と文学」、「兵庫県指定重要有形文化財摂津国八部郡福祥寺古記録 須磨寺【當山歴代】」、「須磨寺御開帳古俳書集」、「生きるための仏教一お釈迦さまの教えてくださったこと」、「三分間説法、しあわせ眼鏡」(須磨寺テレホン法話五年分)、「須磨琴」。さらにカセットテープで「須磨琴の調べ」、「須磨琴の調べ(一弦琴)」。

現代歌人協会賞

女性新人の辰巳泰子に

辰巳 泰子 さん (96期、59年卒)



第34回現代歌人協会賞は、このほど辰巳泰子の『紅い花』(砂子屋書房)に決まった。

この賞は前年中に刊行された新人の歌集を対象としたもので、歌壇への登竜門の一つ。1957年の制定以来、塚本邦雄、佐佐木幸綱ら31人が受賞している。今回の辰巳泰子は24歳、一昨年、

「サラダ記念日」で受賞した後、万智の25歳を下回る、最年少受賞となる。

辰巳泰子は1966年、大阪市生まれ。京都府立大女子短大卒、「短歌人」所屬。

家族や性などを素材に、現実と体当たりする表現に迫力がある。

橋桁にもんどりうてるこの水は

くるしむみづと決めて見てゐる

若い女性の愛と孤独が、みずみずしい感覚でうたわれている歌集だ。

(1990・6・7(木) 朝日新聞夕刊から転載)

六稜同窓会だより

昭5会

六稜四五会(昭7卒)総会

卒業六十年目の触れ合い

小寺 幸正

昭和5年3月3日卒業六十年周年記念祝賀行事二項ある。其一は於有馬温泉有泉閣平成2年3月24日・25両日総会開催、其二是会報第十五号発行である。前者は、小寺司会による開会の辞、恩師水鳥喜平先生(88歳)及び土屋憲三先生(静養中)に記念品贈呈を田鍋健主任幹事より行い、物故先生・学友への黙祷を捧げた上、積水ハウス社長田鍋君は心の青春を讃え、新敷建設プランを紹介殊に旧北野校舎近辺に於ける新梅田シティー実現に向けて六稜魂を打ち込み度いとの意気軒昂を示した。次に太田正君は「日本の高齢化社会を憂う」と題して第21世紀への老人激増若人激減の世相を慨嘆した。更に大塚謙二君は大切に秘蔵して居た天皇軍出征時の日章旗に誌された旧師の御芳名の羅列、武運長久祈願の血と涙と汗の結晶の跡を偲ばせ一同暫し感無量を覚えた。森内君夫人交えて十六名の宴会酬に達して阿波野君音頭取で六稜の校歌を絶叫、小寺司会は閉会の辞に代えて昭五会万歳三唱を誘導した。Yellow Tail 君は教壇裏面史の一端として色白女学生趣味写真選覧旁々、元帝国女子短大「法学」講義時のSex被害調査の極秘統計を披露して驚かせた。宿泊者は九名でうら寒き一夜を談話や戦談で暖まった。後者では水鳥先生の「江崎校長・石崎教頭を顧る」の追憶を始として、土屋先生の「北中の教え子と私」、元編集に功劳あった磯崎君御夫人の「生ある限りルソンへ」の紹介、故森本薫君の年譜、作品「花散りぬ」、故米田一彦君遺稿「老人のエロス」、聖人(故氷室君)「天刑執行人引受待望」、西浜覚三君俳句「木守柿」、角谷良一君の「珈琲の歌」・「誕生日」・「たからずかも御法度」、磯崎忠男君「インドネシアの日本人」、新谷春水君「飛行機野郎篇」、広瀬一郎君「思い出のまゝに」(続)、戸井浩二郎君「参衆両院総選挙を終えて」、足立護君提供の「沈船」ニュース、三谷雄雄君「平成二年の一里塚」、続々大阪文学碑、Yellow Tail 君の「武庫峯夫先生行状記」(自巻三至二十六)に到っては中々興趣を誘うに足る。巻頭言・巻中言・巻尾言は哲学的だ。平成二年度総会報告・東京支部報告や会員便り・訂正・訃報・追悼文(若干名)編集後記で寄附次第で存続の可能性が予測出来る。読みごたえありと言われる。会報発行出来ることは一種の奇蹟であり神祕でさえある。



1. 日時 平成2年6月18日 午後1時始
2. 会場 山手謡曲会館・みのや料理店
(阪急豊津駅前)

梅雨期であったが、晴天に恵まれ、参会者26名の盛会となった。今回は恩師水鳥喜平先生の米寿祝賀会も兼ねていた。総会は山手謡曲会館で始めた。冒頭に水鳥先生に米寿お祝い金を贈呈し、先生から謝辞と懐旧談があった。続いて幹事の年次報告、及び松井の仕舞「実盛」の披露があった。

今回のもう一つのねらいは森繁久弥君の参会である。午後2時より「みのや」の宴会場に移って、一同の要望に応じて森繁氏得意の辨舌と喉を聞かせてもらった。お陰で大いに盛り上がり、一同飲をつくして散会することができた。(出席者、水鳥先生、芦村、有山、磯尾、植田、遠藤、小野、関高、佐藤、高野、竹本、田中静、富田、中野、中村、野添、平形、布施、古江、松井正、松山、森繁、弓削)。幹事——中川、松井。



20回目の四八会東西合同一泊旅行記

最初は関西有志の参加で年1回の忘年会でありましたが、杉山大助君と故石井進君(近畿ツーリスト副社長)の発案で東西合同の一泊旅行会(通称杉山会)に発展し今年は早くも20回目を迎えました。

今年の参加者は首都圏8名、関西から10名、合計18名で去る4月21日～22日に三重県志摩郡阿児町安乗に集合しました。的矢湾入口の安乗岬の眺望は格別であり、伊勢エビ、アワビ、ひらめ等の味は絶品でした。翌日はマイクロバスで箱田山展望台を経て朝熊山金剛証寺を参拝、昼食後に解散しました。来年は奈良県吉野山で残春を訪ねてみたいと企画しているようです。最後に同級生で俳人の古川誠一君の句を紹介します。

なほ残る、花に分け入り奥吉野

(記録 平 浩行)



六稜67期会のお知らせ

昭和30年卒業以来35年が過ぎました。

恩師をお招きして同期会を行います。

日時 平成2年12月1日(土)

PM 5:00 ~ 8:00

場所 大阪綿業会館(三休橋筋 本町4丁目)

会費 10,000円

後日御案内状を郵送します。

幹事 神宅寿昭 ☎06-364-0620
日高 穂 ☎06-854-0524
肥田啓子 ☎0727-57-9365

ハンドボールクラブ50周年記念行事

北野ハンドボールクラブは昭和16年4月に創部され、平成3年に50周年を迎えることになりました。

そこで下記の通り記念行事を行います。

詳細はOB・OG各人に案内いたします。

日時 平成3年7月21日(日)

12時 北野高校講堂及びグランド

4時 大阪サンパレス(予定)にて祝宴

連絡先 神宅(カンヤケ) 寿昭(67期)

大阪市北区西天満3丁目3番4号(06-364-0620)

六稜六二会 40周年総会

六稜六二会は、昭和19年4月北野中学入学、同25年3月北野高校卒業。終戦と戦後の学制改革のおかげで、落第を勘定に入れずに正規6年間北野に在籍できた、六稜120年の歴史のなかでも珍しい記録をもつ期である。中学2年の夏、学校防衛中に2名の友が爆死、高校2年の冬、戦後の思想的混乱から2名の友が自殺、そして、高校3年の春には、野球部が甲子園で全国優勝。まさに激動の時代をのりこえたわれら六二健児は、本年6月2日、有馬温泉で、水島、零石、三木、西田の恩師四先生を、お迎えして、卒業40周年同窓会を挙行了た。

記念講演は、大阪大学文学部長脇田修君の名講義「秀吉の経済感覚」。さてそれから総勢60人は、夜のふけるのもしらず痛飲歓談。翌朝、ゴルフ組22人は、快晴の神戸ゴルフクラブ(六甲山)でナイス・ショット、ナイス・インを連発し、さらに交歓を深めた。



50歳人生の午後四時過ぎ、一人の高校教師に何が？

失踪 missing

それはアイズアルウィスキーで始まった

井通真 (70期)

大阪府吹上区 井通真 著

ISBN 4-7634-0000-0

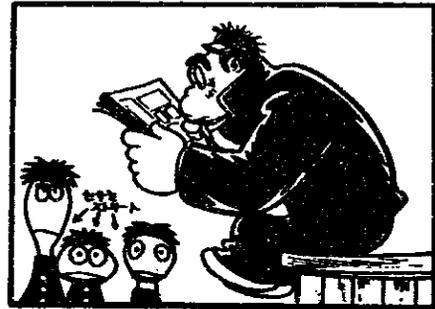
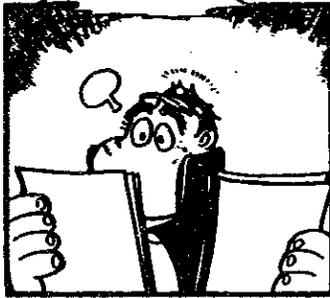
新装版 わくわく大作戦

野球部監督の清水治一さん (57期)

(筆名 まき・ごろう)

本年7月 現役を御引退



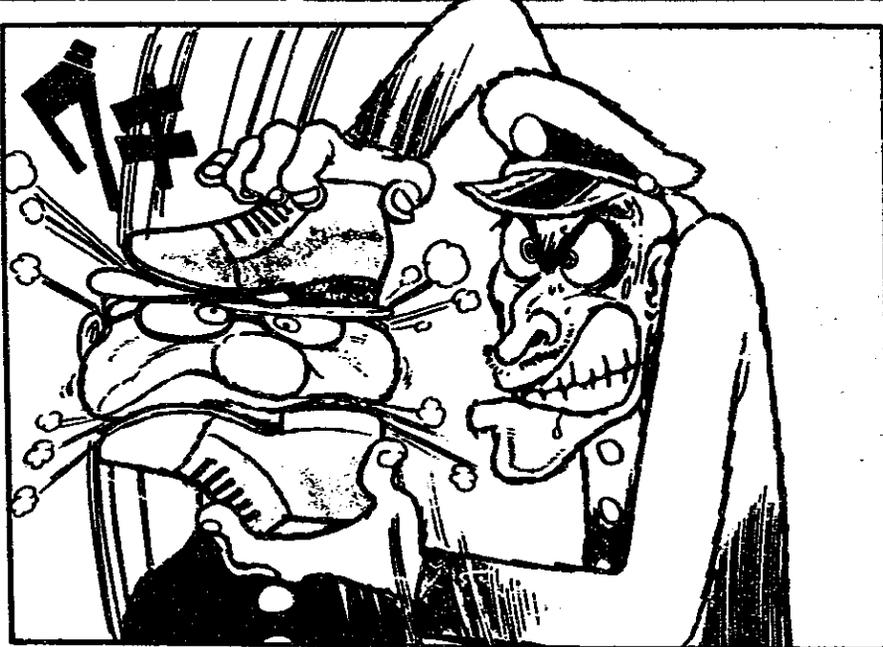
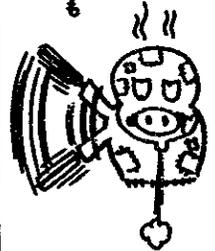




北野と手塚治虫

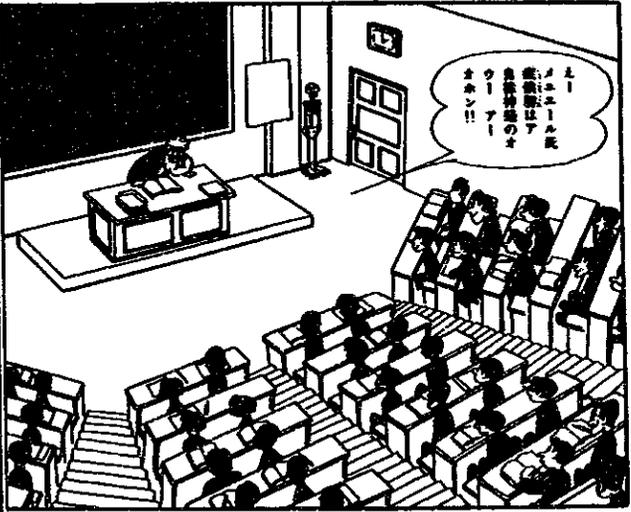
大阪府立北野高等学校（平成2年8月）発行誌から

昭和十九年 出版雑誌令という命令で、さしあたりたいせつでない本は出すことを禁止されておりましたもちろん、マンガは たったの一冊も本屋になかったのです



© 手塚プロダクション

昭和22年10月——大阪大学





母校の窓

職員異動

田上 泰昭先生(S30~H2) 国語
西川 昭子先生(S37~H2) 音楽
足立 時司先生(S38~H2) 倫理
薬師寺春雄先生(S49~H2) 数学
濱田 好計主事(S61~H2) 事務
の先生方が、ご退職になられました。
丸山 明先生(S58~H2、保健体育)
が柴島高校へご転勤となられました。

(平成2年3月31日付) 田上先生、
西川先生、薬師寺先生には特別講師
として引き続きお世話になります。
ご退職後特別講師、非常勤特別嘱託
員、または非常勤講師として引き続
きお世話になりました先生方のうち
堀之内幸則さん、中川義邦先生は既
におやめになり(S63年)、この春に、
植村繁一先生、田中博先生は北野を
去られました。次の先生方を4月1
日付で後任としてお迎えしました。
井上和彦先生(保健体育) 茨木工業
西淵万吉主査(事務) 西野田工業
山内 聡先生(政経) 常勤講師
玉置 勝先生(保健体育) 常勤講師

御不幸

本年1月、伏谷峰矣先生(旧職員、
S26~S57英語)がお亡くなりにな
りました。心からご冥福をお祈り申
しあげます。

第5回文化活動振興賞決定

高木和弘君(現3年生、第58回日本
音楽コンクールバイオリン部門第一
次予選入選、本校文化祭参加等、学
校内外のバイオリン演奏活動に対
して)に決まりました。文化祭当日、
博本正和先生が選考委員を代表して、
高木君に本賞楯と賞品を贈り、勵ま
されました。

御寄付いただきました

山岳部インターハイ出場(男女共、
昨年8月)に際し、六稜同窓会より
50万円を山岳部に対し御寄付いた
だきました。また、今年度旧図書館の
一部改修につき100万円の御寄付を
いただきました。ありがとうございました。

クラブだより

2. 8. 1 現在

【女子バスケットボール】

公式戦、大阪高校総体57-47高槻南、
63-52島上大冠、23-82島本。府立
高校大会、45-56千里、44-41箕面、
82-40福井、30-64池田北、59-62
春日丘。新人戦、74-31追手門、35
-68池田北。全国高校総体府予選、
50-30交野、55-56岸和田。
定期戦、45-47天王寺。

【合気道】

8月上旬、天之武産合気塾道場にて
合宿。3月からは文化祭演武の練習。
6月下旬府下高校合気道部合同練習。

【器械体操】

二部大会、男子個人総合3位床2位
(岡澤)。府立高大会、規定女子団体
総合7位女子個人総合17位(土屋)。
自由、男子個人総合6位跳馬4位平
行棒5位(岡澤)。大阪高校総体、男
子個人総合優勝(岡澤)。新人大会、
男子団体総合7位。男子個人総合、
床、平行棒、優勝。鞍馬、吊輪、鉄
棒、2位(岡澤)。女子自由個人総合
19位(土屋)、20位(久保)、春季大会
女子団体総合14位。

【陸上競技】

高校駅伝大阪予選9位。大阪高校女
子駅伝18位。

【柔道】

公式戦、大阪高校総体、対岸和田産
業負。北地区大会、対大手前勝、対
東淀工A負、対同校B負。北地区新
人戦、対三島勝、対東淀工負。府予
選北地区大会、対少路勝、対東淀工
負。女子府予選対東商勝、対金剛負。
定期戦、対天高戦点取、勝抜共に負。
連絡先 〒561 豊中市庄内東町6-
8-4 福田 稔 宛

【ハンドボール】

公式戦、秋季総体予選、男子対扇町、
市岡、東豊中、大阪商業、桜宮、勝。
中央大会、15-25門真南。春季総体
男子、対桜塚勝、対大阪商業負。女
子、対桜塚勝、対宣真負。
天高戦、男17-16勝(新人)、22-27
(現役)。女7-17(新人)、16-24
(現役)。

【男子テニス】

第一学区杯、片岡ベスト4。春季団
体戦本戦出場。大阪ジュニア、改田
本戦出場。

【女子テニス】

公式戦、大阪高校総体、河崎、角倉、
本戦。野島・山路組本戦2回戦。秋
季大会、団体戦、福岡、奥村、河崎、
野嶋、ベスト8。春季大会、野嶋・
山路組ベスト8、福岡・奥村組、岡
村・砂田組本戦。福岡、本戦3回戦
野嶋、本戦2回戦、河崎、山路、岡
村、本戦。

【男子バスケットボール】

公式戦、大阪高校総体、46-62茨木
西。新人大会108-23大阪青稜、49
-55摂津。大阪高校選手権、95-20
港南、42-58泉尾。定期戦、四高定
期、82-72灘、61-75神戸。
天高戦、72-66天王寺。

【美術】

第41回高校展に25点出品（天王寺美術館・8月）。初の試みとして校内展開催（12月）。第1ブロック展25点出品（2月）。文化祭では3教室にわたり展示。作者解説パネルも併設。

【映画研究】

8ミリ映画「NO・TITLE ON MEANING」、ハリウッド時代の女優に関する展示を文化祭にて。定期刊行誌「映研だより」発行。

【料理研究同好会】

大阪ガスの各種料理講習会に参加。文化祭ではケーキ等展示。

【写真】

文化祭に約70点の写真（カラー約20点）を展示。1年生のみでいろいろ苦勞しながら活動中。

【物理研究】

アマ無線局（JA3YFZ）の運用、パソコンソフトの開発、電子工作等の活動。

【オーケストラ】

六校祭（メンデルスゾーン・交響曲三番第一楽章）、扇町教会音楽礼拝、関西アマチュアオーケストラフェスティバル（ベートーベン・フィデリオ序曲）、文化祭（ベートーベン・八番）出演。六校祭に向けて、モーツァルト「ジュピター」第一楽章に取り組む。

大学合格者一覧表 (2.5.2 現在)

国立	男女	計	公立	男女	計	私立	男女	計	合計	男女	計	
北海道大	1	1	福島県立医科大	1	1	天王寺看護私大	2	2	金沢工業大	1	1	
東北大	4	4	高崎経済大	1	1	相愛大	2	2	愛知学院大	2	2	
筑波大	2	2	横浜国立大	1	1	摂南大	1	8	岡山理科大	2	2	
千葉大	2	2	静岡文科大	1	1	帝塚山学院大	5	5	川崎医科大	1	1	
東京大	8	3	静岡県立大	1	1	梅花女子大	4	4	合計	31	73	
東京外国語大	1	1	名古屋市立大	2	3	桃山学院大	1	3	大	男	女	
東京農工大	1	1	京都市立芸術大	1	1	関西学院大	36	52	88	計	計	
東京工業大	4	4	京都府立大	5	5	甲南大	6	10	16	大	大	
お茶の水女子大	2	2	京都府立医科大	1	1	甲南女子大	6	6	6	大	大	
電気通信大	1	1	大阪女子大	1	1	神戸女子学院大	8	8	8	大	大	
一橋大	2	2	大阪市立大	18	18	神戸学院大	4	4	4	大	大	
横浜国立大	4	4	大阪府立大	22	4	26	神戸女子大	5	5	5	大	大
新潟大	1	1	神戸市外国語大	2	2	2	神戸女子薬科大	22	22	22	大	大
金沢大	1	1	神戸商科大	5	1	6	松蔭女子学院大	5	5	5	大	大
福井医科大	1	1	姫路工業大	2	2	2	親和女子大	3	3	3	大	大
静岡大	2	2	奈良県立医科大	3	1	4	兵庫医科大	3	4	7	大	大
静岡大	1	1	下関市立大	1	1	1	武庫川女子大	17	17	17	大	大
名古屋大	2	2	合計	64	38	102	天理大	1	1	1	大	大
名古屋工業大	1	1	私立	男女	計	流通科大	1	1	1	大	大	
三工大	2	2	京都外国語大	3	9	12	徳協大	1	1	1	大	大
滋賀大	5	2	京都産業大	2	1	3	清山学院大	2	2	2	大	大
滋賀医科大	6	1	京都女子大	21	21	21	学習院大	1	1	2	大	大
京都大	4	7	京都薬科大	5	10	15	共立薬科大	1	1	1	大	大
京都教育大	1	3	光華女子大	2	2	2	慶応義塾大	23	7	30	大	大
京都工芸繊維大	9	3	京都橘女子大	1	1	1	国際基督教大	1	1	1	大	大
大阪大	57	17	同志社大	60	21	81	実践女子大	1	1	1	大	大
大阪外国語大	3	8	同志社女子大	21	21	21	芝浦工業大	1	1	1	大	大
大阪教育大	5	22	27	18	15	33	上智大	7	2	9	大	大
神戸大	21	15	36	4	5	9	昭和女子大	1	1	1	大	大
奈良教育大	3	3	大阪医科大	7	1	8	昭和薬科大	1	1	1	大	大
奈良女子大	12	12	大阪学院大	1	1	2	専修大	1	1	1	大	大
鳥取大	2	2	大阪経済大	2	2	2	拓殖大	1	1	1	大	大
鳥取医科大	1	1	大阪経済法科大	1	1	1	中央大	7	7	7	大	大
岡山大	1	1	大阪芸術大	2	2	2	津田塾大	8	8	8	大	大
岡山県大	3	3	大阪工業大	4	1	5	東京女子大	2	2	2	大	大
山口大	1	1	大阪産業大	1	1	2	東京農工大	4	4	4	大	大
徳島大	1	1	大阪農科大	1	2	3	帝塚山短	1	1	1	大	大
愛媛大	3	3	大阪樟蔭女子大	1	1	1	青山学院女子短	2	2	2	大	大
高知大	1	1	大阪商大	1	1	1	共立女子短	1	1	1	大	大
高知医科大	1	1	2	1	2	2	日本文学大	2	5	7	大	大
九州大	2	1	3	17	20	20	日本獣医畜産大	1	1	1	大	大
佐賀大	1	1	1	2	2	2	明治大	4	1	5	大	大
長崎大	2	2	2	46	43	89	明治学院大	1	1	1	大	大
鹿児島大	1	1	1	5	1	6	立教大	4	4	4	大	大
琉球大	1	1	1	1	2	2	早稲田大	29	7	36	大	大
合計	288	88	376	8	12	20	金沢医科大	2	2	2	大	大

プロフィール

三井物産の社長になった

熊谷直彦さん(57期)



「社長に決まった方がよく、「青天のへきれき」と言われるが、まさか自分もそうなるとは」「交代の6月まで時間があるので、しっかり勉強して大役に取り組みたい」

記者会見の席上、身をかがめるようにして語った。昨年11月、欧州三井物産(ロンドン)から本社に戻り、次期社長の有力候補と目されていたが、「まったく頭になかった」。

だが、三井物産を長年苦しめ続けたイラン・ジャパン石油化学(IJPC)の事業清算が完了し、業績も順調な中での登板に、「会社は非常にいい時代を迎えていると思う。このツキを逃さず、さらに伸ばしていきたい」と控え目ながら意欲を見せる。

京都大学卒業後、「世界を相手にした貿易をやりたい」と1948年、繊維の輸出入を一手に扱っていた繊維貿易公団に就職。2年後、民間貿易への移行に合わせて、第一物産(現三井物産)に入社。もっぱら繊維畑を歩んだ。繊維出身の社長は戦後の三井物産では初めてだ。

インドネシア、フランス、南アフリカ、英国など、海外勤務は通算18年。入社以来、ほぼ半分を海外で過ごした国際派でもある。クラシック音楽、特にマーラーのファンで、英国勤務時代は足繁く演奏会に通った。

江尻宏一郎・現社長の六高(現岡山大学)の後輩。柔道部だった江尻氏に対して、熊谷氏は弓道部。「同じ「道」でも江尻さんは「十」(柔)で、私は「九」(弓)。一本足りません」。信条は「誠実」という人柄そのままの語り口である。

(1990・3・1 朝日朝刊「顔」欄から転載)

リンゴの赤い色素の

生産に成功した

友田勝巳さん(63期)



西宮市生まれ。大阪市立大理学部で酵素化学を専攻。1957年、武田薬品工業に入社。研究所で酵素を中心に研究。今春から応用技術研究所副所長。57歳。

「ラッキーでした」という。赤い色素は、光、ホルモンなど特殊な条件下で偶然に出現してきたからだ。

果実を使った色素の大量生産は世界でも例がなく、食品、薬品、化粧品などの用途が期待できる。なによりも「リンゴの口紅ができるかもしれんよ」と奥さんに話したら「フレッシュな感じ。つけてみたいわ」。フルーツ路線に自信を深めている。

3年前に「植物細胞を利用した製品開発」を命じられた際、「畑違いです」と固辞した。だが、上司から「全く素地のない君の自由な発想で」と口説かれ、引き受けた研究が実を結んだ。

入社時はセールスエンジニア志望。ところが、酵素の製品化を目指す研究グループに組み込まれ、長い間キノコから抽出したたんぱく分解酵素の開発にあたってきた。続いてヒット商品の消炎酵素剤をつくりだし、7年前には日本農芸化学会の技術賞を受けた。

新しい農業に使うため、品質が一定のリンゴ苗(クローン苗)をつくってほしい、というのが注文だった。スターキングの遺伝子を含む生長点(わき芽)細胞の培養に手をつけ、去年春、研究者が容器の中の薄緑色の細胞群(カルス)の中にポツンと一つ赤い細胞をみつけ、それが色素を生産することを突き止めた。

色素、着色料は安全性が一番のポイント。「その点、リンゴは身近な果実ですから心配はありません」。武田薬品は来春、大阪・鶴見緑地での花の万博で、植物バイオの成果として展示する。

趣味は高校の合唱部時代からの歌で、カラオケはムード歌謡が得意。十八番(おはこ)に「リンゴの唄」が加わることだろう。(林 梓生記者)

(1989・9・12 朝日朝刊「ひと」欄から転載)